偶感あれこれ

駒澤大学名誉教授　佐々木宏幹

仏教企画通信

発行日｜平成28年9月1日　45号

発行所｜有限会社　仏教企画
〒252-0113
神奈川県相模原市緑区谷ケ原2-9-5-5
Tel.042-703-8641
Fax.042-783-0989

発行人｜21世紀の仏教を考える会代表
㈲仏教企画代表　藤木隆宣

Email｜fujiki@water.ocn.ne.jp

木造校舎で過ごした小学生時代

神奈川県の横須賀市に住む角皆（つのがい）尚宏さん（二六歳）は、全国の小・中・高校の木造校舎を訪ねて写真を撮る旅を続けているという。そのきっかけは五歳のときに目にした「学校の怪談」という映画であった。映画に登場する木造校舎の古くてほの暗い空間や木肌の陰影に、怖いというよりもわくわくした。この映画がビデオ化されると、借りてきて繰り返し見たり、小学校の先生に「木造校舎ってどんな所にあるんですか」と質問したりした。角皆さんは六年生のときに父にせがんで『木造校舎の旅』という本を買い、表紙が擦り切れるほど読みこんだ。その後、父が運転する車で北海道から九州まで全国の木造校舎を訪ね歩いたそうだ。

群馬県のある私立高校は、偶然取り壊す直前であり、応対してくれた副校長先生が「あなたが最後の訪問者でしょう。できればぜひ残したかった」と話したのが忘れられないという。

これまで巡った学校は一一一四校を数え、沖縄県を除く四六都道府県に足を運んだ（「過去埋める木造校舎の旅」、「朝日新聞」二〇一六年五月二三日夕刊）この記事には各地の木造校舎のうち三校のカラー写真が掲載されており、何とも懐かしい。七〇年以上も前に私が通った小学校を彷彿とさせたからである。

一校は神奈川県相模原市立青根小学校であり、この校舎は現役で使用されていたが、本年（二〇一六年）四月に全焼した。その折、新聞やテレビがこの校舎を報道・放映しており、私はそれを見て、ああ私が学んだ小学校とそっくりだと思った。私が学んだ木造二階建ての校舎は、真中に先生たちが出入りする白塗りのおしゃれな玄関があり、左右には生徒用の入口があった。廊下は放課後に高学年の生徒たちが雑巾掛けをするのでてかてかに光っていた。

当時の小学校は「尋常高等小学校」と呼ばれ、尋常小は六年、その上の高等小が二年の課程であった。六年の課程を経た者は卒業するか、高等科に進むか、中学校（旧制）に進学するかした。卒業式が近づくと「卒業生を送る歌」の練習に励んだ。卒業生たちを前に在校生が歌った歌は「年月めぐりて早幾年　卒業証書を受くる身と　なりぬる君らが嬉しさは　そもそも何にか喩うべき」というものであった。上級生にはよくできる子がおり、女子が多かったと思うが、その子らは先生からも一目置かれている生徒からも一目置かれていることがあった。こういう生徒を目にすると、畏敬の念というか羨望の念というか、特別な思いを抱いたものである。

私は小学六年生卒業後、県立中学校に入学したが、一九四二、三年（昭和一七、八年）頃中学校に入学する子はとても少なかった。そのせいか、中学に入った先輩は何となく偉そうに見えた。中学校の先生も格上の人と映った。日頃から憧れていた一先輩は、入学前の私に先生たちの綽名を得意げに教えてくれた。英語の先生は「ザンバ」、化学の先生は「アゴ」、数学の先生は「アオ」そして体操の先生は「エントツ」であった。入学後に先生たちの顔をみて、先輩たちが口にしていた綽名の的確さに驚いたものである。

小学生のときは誰から教わるともなく口にしていたのは「着物を着替え帯を締め　鞄を下げて学校へ　先生の言うことよく聞いて　立派な子供になりましょう」という歌であった。

当時の小学校生徒の服装の多くはつんつるてん（丈の短い脚があらわれている）の着物で、多くは藁草履を履いていた。あとは下駄履きで靴（ズック）を履いている者は珍しかった。

今の若者たちには昔話に聞こえるのではなかろうか。

「戦争っ子」の時代を生きて

私が小学校に入学したのは一九三七年（昭和一二年）の春であったが、この年の七月七日に日中戦争の発端となった盧溝橋事件が勃発した。この事件はよく知られているように、一九四一年（昭和一六年）一二月八日に開戦した太平洋戦争と繋がっていく。

以前にも記したことがあるが、右のような意味で私はまさしく「戦争っこ」であった。小学一年生の夏に日中戦争が始まり、五年生の冬に太平洋戦争に突入、中学三年の夏に大戦争は敗戦で幕を閉じた。ちなみに、私が生まれた翌年（一九三一年・昭和六年）には満州事変が勃発していた。こんな訳で、私が物心ついた頃は日本社会全体が戦争づいていた。

いまだに忘れられないのは小学生時代の「教育勅語」奉読である。子供の目には雲の

木造校舎（旧青根小学校）

上の人に見えた校長先生が入学式、卒業式はもとより、いろいろな機会に読誦するのが教育勅語であった。勅語奉読の際は全員が不動の姿勢をとり低頭して聴くよう先生から強く言われた。

一年生の時の校長先生はD・Y先生であり、五〇代であったと思うが威厳と貫禄を具えた方であった。つねに落着き払っており、先生が姿を現すと生徒たちは皆姿勢を正して挨拶した。式が行われるときには先生は礼装姿（モーニング・コート）であり、ふだんよりずっと立派に見えた。「教育勅語」の一部を紹介しましょう。

「朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ恭倹己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ……一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壌無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ……」読み難い漢字にはルビを付した。

いま改めて読んでみても難しいのだから、まして小学生においておやである。校長先生が勅語を読む際には独特な抑揚を用いたので、子供の心には日常を超えた世界にいるように聞こえたものである。勅語が終わると校長先生の勅語解説が始まるのだが、その直前に頭を上げた子供たちが一斉にズルズルッと鼻を啜り上げる音が講堂中に響いた。

校長先生の話は必ず日中戦争のことに触れ、生徒たちがこのように勉強できるのも、ひとえに戦場で戦っている兵隊さんたちのお蔭であることを強調し、勅語の「一旦緩急アレハ義勇公ニ奉ジ以テ天壌無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ……」に触れた。「一旦緩急」は「ひとたび緊急な大事が始まれば」を意味し、「天上無窮ノ皇運」は「永遠に続く皇室の運」を指すが、当時の子供たちがどう理解したか、いまとなっては忘却の彼方にある。

ただ五・六年生の元気な子が隊長になり、二・三年生が兵隊になって「戦ごっこ」をよくやった。隊長が「突撃！」とか「突貫」とか大声を挙げると、兵隊たちは竹や木の棒を持って鬨の声を挙げて全力で駆けだしたことは今も記憶から失せない。徹底して「戦争っ子」であったのである。

道徳的目覚めを裏づけるのは「宗教的目覚め」

太平洋戦争が幕を閉じてから七〇年以上の時が過ぎた。七〇年と言う歳月は長いと思うか短いと感じるか人それぞれであろう。あなたはどう思うかと問われたら、答は「長いようでもあったし、短いようでもある」となろうか。「あれか、これか」の二分論では済まないのが人生というものであろう。ここで人生論を述べるつもりはない。とにかくこの七〇年間、この国は戦争をしていない。物心がついてから一五年、戦争時代を生きた自分にとって、この平和な七〇年はこの上なき僥倖としか言いようがない。

七〇年前の第二次世界大戦では、ヨーロッパのドイツとイタリー（両国とも日本の同盟国）を別として、日本はアジアで孤立して欧米列強と戦った、結末は「無条件降服」であった。降服の日を私はよく憶えている。一九四五年（昭和二〇年）八月一五日は晴れ上がった暑い日であった。正午に重大放送があるというので皆ラジオの前に集まった。敗戦（終戦）を告げる昭和天皇の声は雑音のためよく聞こえなかったが、誰言うとなく「日本は負けた」という事実を知った。この日の出来事については、すでに各種メディアを通じてほぼ明らかにされているので、素人の私が何の彼のと言う必要はなかろう。「日本は負けるかもしれない」という予感は表だって口にはしないものの、誰しも暗黙のうちに気づいていたはずである。

私が住んでいた小さな港町（現気仙沼市）もグラマン戦闘機の攻撃を受けており、対抗する手段は皆無であった。食べる物もなくなり糅飯という米に芋や大根の葉その他を混ぜたご飯をお握りにして持ち歩き、空襲があると近くの小山に登り、夜は蚊帳を吊ってごろ寝した。

最後にこの国の息の根を止めたのは、広島市と長崎市への原子爆弾の投下であった。この話も繰り返すことはなかろう。

去る五月下旬に開催された主要七か国（G7）首脳会議に出席した米国のオバマ大統領は、現職大統領としては初めて広島を訪れ、原爆死没者慰霊碑に献花し黙祷を捧げた。

その折にオバマ氏は広島訪問の理由を「閃光と炎の壁が都市を破壊し、人類が自らを破滅させる手段を手にした。私たちはそう遠くない過去に解き放たれた恐ろしい力に思いをめぐらすために（ここに）来た」と語り、更に戦争の悲惨さを訴えて、「外交を通じて紛争を回避し、すでに始まった紛争の終結に尽力しなければならない……（広島に原爆が投下された）一九四五年八月六日の記憶を薄れさせてはならない」と述べたという（「朝日新聞」五月二八日（土））米国にはオバマ氏が広島を訪れることに反対する人も少なくなかったというが、そうした状況のなかで、慰霊碑に黙祷した氏の行動を多としたい。

戦後七〇年が過ぎ、戦争とその悲惨さを知らない人たちが八〇%を超えている今日、幸いにして生き延びてきた私たちは、戦争は絶対してはならないと若い人たちに説き続けなければならない。説き続けるだけでなく、説く内容をとくと吟味し深めなければなるまい。その中核は「命の尊さ」ではないか。「命あっての物種」という諺があるが、その裏の意味は「死んだらおしまい」である。

しかし、こと宗教にあっては「死んだらおしまい」では決してない。「死んでも命は続く」という思想や信心（信仰）を欠くと「宗教の命」は枯渇し弱体化しようからである。ことに日本人の宗教はその思想・信心（信仰）を欠くと成立すること自体危ういのではないか。

私たちの宗教には理窟はともかく「教（開）祖信仰」であれ、「死者・先祖信仰」であれ、「自然崇拝」であれ、その基盤には「命」を尊び崇めるという思想と感情（感覚）が宗教的マグマとして潜在していると言えようからである。（拙著『仏力—生活仏教のダイナミズム—』春秋社、二〇〇四年参照）さきに引用したオバマ米大統領は「核なき世界は私たちが道徳的に目覚めることにより実現できる」旨の話をしたが、道徳的目覚めを裏づけるのは「宗教的目覚め」であろう。

私が「いま思い、感じること」の中味は実は釈尊が格調高く謳いあげられておられる。「すべてのものは暴力に脅え　死を恐れる　わが身にひきあてて　殺してはならない　殺させてはならない　すべてのものは暴力に脅えている　すべての生き物にとって　生命は愛しい　わが身にひきあてて　殺してはならない　殺させてはならない」（『ダンマパダ』一二九、一三〇）

旧青根小学校廊下

仏教という大切な財産を生かすために

精神対話士 前田宥全師に聞く

聞き手 藤木隆宣

真言宗僧侶の父の背中を見て

藤木　正山寺さんは、ここに入られて何年になられますか。

前田　平成八年の五月からですので、二〇年ですね。

藤木　檀信徒とのかかわり方を変えていかなければと思ったきっかけは何ですか。

前田　私が生まれ育ったのは真言宗のお寺で、住職であった父の寺の運営の仕方、檀信徒さんとのかかわり方が私の理想になっているんです。実家は信者寺でして、下町の多くの人の行き交うところにあるものですから、いつも本堂の前は開けっ放しで、ひっきりなしに参拝者が本堂に上がってきていました。

藤木　いいですね。

前田　そうですね。とても和やかで自然な形です。信者さんが上がってお参りをし、お参りが終わると住職である父のところに来て話をする、そんな光景を私は小さいときから見てきました。

藤木　お寺というと結構敷居が高いので、そういうお寺は珍しいですね。

前田　それが珍しいことだというのは後に気付きました。初めてここの寺に来たときに、本尊にお参りするどころか玄関にも訪ねて来ない。山門を入ってくれば、そのまま霊園に来たかのようにお墓に一直線に行ってしまう。その状況を見て、何だこれは、と思ったわけです。これはまずいな、と。それがきっかけですかね。

父の場合は、僧侶としてどうあるべきか、というところを非常によく考え悩み試行錯誤したのではないかと今になって思います。

藤木　どういうことで悩まれたのでしょうか。

前田　閉ざしてしまえば、それはそれで運営はできるわけですね。けれども、そこをあえて全部開け放す。本来参拝することを目的とするならば、外に出ているお賽銭箱の前で浄財をして、手を合わせればそれで事足りるかもしれない。それをあえて誰でも入れるようにしたわけです。その違いというのはとても大きくて、靴を脱いで上がるのと、靴を脱がないでそのまま外から手を合わせるのでは、人間の心理として全然違ってくると思います。

靴を脱ぐというのはイコール気持ちを開くということでしょうか。靴を脱いでお寺に上がるということはせかせかとお参りをするのではなくて、せっかく来たのだから自分のある程度の時間を確保して、ここにいさせていただこうという余裕も生まれているということだと思います。

その違いは大きいと思います。しかも父はほとんど三六五日、本堂の片隅に事務用のテーブルを出して、一日中事務仕事をしながらそこに坐っていました。その覚悟はすごいなと思います。

檀信徒のことを考えれば、やらなくてはいけないこと、寺として住職としての理想の形が見えてきます。かといって理想を全て形にできるわけではないので、その葛藤は多かったと思いますし、不特定の人と向き合うということも大変なことです。

何をすべきか、ご本尊に問いかける

前田　父の場合は、お参りが終わった後、もし何か心の中に吐き出したいもの、話したいことがあるのであれば、どうぞ来てくださいよというような心持ちでいつも坐っていたに違いないと思います。このような姿勢は、檀信徒とのやり取りを考えていくときに大切なところではないかと思うんです。

藤木　お寺によって忙しいところもあるでしょうが、住職の姿勢としては、そういうことが必要だということにまず気づかないといけないですね。

前田　私の気づきの基準になったのは時間あったことです。この寺に来たときは無住寺で、ぼろぼろの状態でした。法事もほとんど月に一件あるかないかの感じだったので、毎日、何をやればいいのか分からない。ただ本堂でひたすら坐禅をしていました。坐禅をしていればいいかというとそうではなくて、檀家寺の住職である以上、本来は仕事があるはずなのにないわけですね。そうすると、だんだん自尊感情がそがれていきます。

いつの間にか、ご本尊を見ながら涙が出てくる。一体何をすればいいんでしょうかなんて問い掛けたりしていました。そんな葛藤がありながら、新聞を読んでいると、院号を付けると何百万とか、というような話題が社会問題といいますか、一般社会の問題として取り上げられる。あるいは、うちの菩提寺の住職は法話もしてくれない、お経も十分ぐらいしか読まないというような記事が出ています。そういうものを読んでいるうちに、一体私は何をするべきなのかということを、だんだん考えられるようになってきました。

そういう意味では放っておかれる、自分で考える時間を持つということはとても大事なことだと思います。

子弟教育はいかにあるべきか

藤木　お坊さんになるということは、お寺に生まれてご縁があったということですが、宗門人としての子弟教育はこうあるべきだということは、きちんと示していないところに問題があるかと思います。

前田　そうですね、子弟教育とはこうあるべきだと、それについて私も聞いたことがありません。今色々なところで徒弟教育についての話題を耳にしますが、どうあるべきか、明確にされていないですね。

藤木　もちろん、試行錯誤しながら組みたてていけばいいかと思いますけれど、まずは曹洞宗の子弟教育とはこういうものだという基準になるものですね。それに照らして自分のお寺はこうであると、あるいは子弟が志をもってすすんでいくための灯明が必要かと思います。

前田　おっしゃるとおりです。ただ、その志を立てるのは当然のことで、ある意味容易なことだと思います。継続していくのに難しいところがあるのではないでしょうか。なぜ難しくしているかというと、普通のサラリーマンであれば会社に属し、これだけの給料をもらっているとか、あるいは社会的な評価を得られたりするわけです。ところが、僧侶の場合、よっぽど何か特別なことをしないと、その評価は得られませんね。自尊感情を高められるような、自己肯定感を高められるようなことがあるかというと、あるようでないですよ。そもそも評価を得る必要はありませんが、

継承の問題を考えた場合、それは重要な課題だと思います。

　例えば、毎日檀家さんが来て、「いつも私たちのためにありがとうございます」と言ってくれるかというと、決してそうじゃない。下手な法話をしたとして、「いやいや、それでもありがたいお話です」と言ってくれるかというと、そうじゃないわけです。だから、その辺はもっと工夫して、一僧侶うんぬんではなく宗門として、いわゆる社会苦に積極的にかかわっていくなり、評価を求めない宗門僧侶としての自覚を問うことが必要かと思います。社会の中で自分はどういう位置づけなのか、宗門僧侶として何をすべきなのか、ということが分かりにくい状況かなとは思いますね。

　例えば、自死・自殺という生き方の問題であれば、僧侶とか寺院に期待され求められているところが大きいと思うんです。自死・自殺で亡くなるというのは生き方の問題ですので、生き方を説くことのできる宗教者は重要だと、それはみんな気づいているはずです。にもかかわらず、なかなか積極的にかかわろうとしない。ものすごく残念なことです。

藤木　そうですね。その辺のこと、宗政を担っておられるような方々は逆に気づいていないかもしれない。個々の住職としてはやっぱり土日は法事で忙しいとか、それに葬式が入ってくるというようなことでしょう。だけれども、社会苦にどう向き合うかということはおっしゃるとおり僧侶の大事な役目です。一方の法事・葬式とともに、車の両輪くらいの比重をおいて考えていく必要がありますね。

精神対話士として学び始めて

藤木　前田さんは精神対話士という資格をおもちですが、これはどういうところから資格をとろうとお考えになったのですか。

前田　もともと私がそういうことを学んだのは大学生のときです。それは初めから興味があって学んだというのではなく、たまたま児童心理という授業をとったことで関心を持ち始めました。大学四年のときに私は僧侶になることを決めて、永平寺から戻ってきたとき、先ほど申し上げたような寺の状況で、霊園のようになっていたわけです。これはおかしいぞと感じ、さあどうするかと考えたときに、私が人としっかりと向き合えるだけの何かを持っていなくては話にならないと気づきました。

　最初は臨床心理士の学校にも通いましたが、人をカテゴライズするところに疑問を感じて、そのほかにもいろいろと関心を持って学んだこともありましたけれども、最終的には今所属しているメンタルケア協会の設立趣意や対話のもつ力に惹かれ精神対話士という資格を得るべく勉強をしたということです。

　さらに、そこから徐々に人との対話の実践を重ねて、どうあるべきなのかということを深めていきました。基本的にはいわゆるカウンセリング理論を基にして人とかかわっていく。ただ、それをやっていくだけでいいかというと、そうではないので、そこからは自分の工夫の仕方だと思います。相手になる方はみんなそれぞれ別人格の方ですから。幸いそのベースには仏教がありますので、ありがたいことです。

藤木　永平寺には二年半おられたとのこと、そこで学んだことは基本になりますか。

前田　勿論です。特に一日の生活の流れや細かな作法が決められた生活は、自分自身の心の動きや傾向もよく観察できますし、同じ安居者のことも観察できます。同じ生活をしていく中でも皆違った物事の捉え方や傾向を朝から晩まで毎日観察し経験することができたことは、自他の区別をはっきりとさせ、違う感受性であることをよりはっきりさせることができ、大きな影響がありました。さらに、僧侶としての生き方を追求する人が多い中にいるわけですから、個人の生き方、関係性の中での生き方などについてもとても学びになりました。

藤木　そういうところから、先ほどのお父様のお話になりますが、その姿勢をみて、それをモデルとしてご自分も勉強されていったということですね。これは僕自身の反省も含めてのことですが、宗門では、本来のあるべき姿のモデルにならないお寺が多いんじゃないかと、例えば今の子弟教育についてもですが。

前田　本山の僧堂教育として、それがなかなか賄えていないということはあるかもしれません。釜田宗務総長になられ盛んに本山僧堂での教育について言及されている、その辺は一つの希望かなと個人的には感じています。

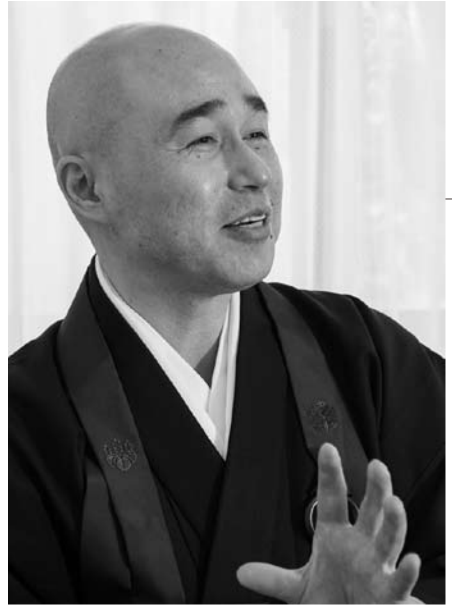
相談者の思いに視点を向ける

藤木　「あなたのお話し、お聴きします」という活動を始められてからは、どれぐらいになりますか。

前田　具体的にポスターを貼って始めたのは平成一三年の春です。丸一五年ですか。

藤木　一日三件、一件につき八〇分ということですね。

前田　そうです。相談者は増えていて、相談者数を正確にいいますと、九六九九人。相談数、対話回数でいうと、六千二百七十回ですね。一日に少なくとも一人は必ずいらっしゃるような状況です。こんなに大変だとは正直思いませんでした。ポスターは掲げていますが、今ほとんどの方はネットで調べて来られる。「僧侶、話を聞いてくれる」とか、「寺、話し聞いてくれる」というようなことで検索をして、大体ヒットするようです。



本当にいろいろな相談内容があって、例えば高齢者の方が「私に孫ができました」と言ったとしますと、それは状況で、それによってその方がどういう感情を抱いているのかは分からない。多くの場合は「ああ、よかったですね、お孫さんができて」と応じるでしょう。けれども、その方がよかったと思っているとは限らないじゃないですか。孫ができたことによって、自分が大切にしてきた時間を奪われてしまったとか、中には面倒だという方もいらっしゃる。あるいは自分の小さいときに親から虐待を受けていたことを思い出して、つらい思いをしているかもしれない。人によって感情は違うので「そうですか、それで、どういうお気持ちですか」と、その方の思いに視点を向けることが大切です。

　お寺によくある相談として、仏事的な相談が当然ありますね。例えば、「これは違うお寺さんでも相談したけれども、もう一度確認をしたいので、ちょっとお札のことについてお聞かせいただいていいですか」といって来られた方がある。「実は私、近所の方からお札をいただいた。魔除けらしいのですが、どちらの方角に向けて、あるいはどちらを背にして貼ったらいいでしょうか」と。

　「それは前のお寺さんにも、同じことを相談なさったんですか」と聞くと、「そうです。実はちょっとそこで納得がいかなかったので、もう一度確かめようと伺いました」とおっしゃる。どちらに向けて貼ったらいいかと問われれば、普通は当然ですけれども、私の知る限りではこちら側です、あるいは今年はこちらが吉ですと答えますね。「曹洞宗では、そんなことは関係ないですよ」という答えがあるかもしれませんけれども。

　そのときに、単にその受けた質問に対して答えるのではなく、それがなぜ気になるのかということを私は聞くようにしています。まさにそれをお聞きしたところ、その方がすごく怒り始めた。「どうしましたか」と聞いたら、「私の息子が一年前に自殺してしまった。それを知った近所の人が、私の家には悪いものがついているから、これで魔除けをしなさいと持ってきたのがこの札です。とんでもないことで、私の家には魔ものがいるわけではないし、息子がそれによって死んだわけではない」と言う。

　実は、それを話したかった

んですね。なるほどと思って、「そうですよね。じゃあそのお札、どうしましょう」「こんなもの、私は必要ありません。こちらでお焚き上げしてください」と、結局ここに置いて帰りました。本当にこちらのかかわり方一つで相談者の主張が変わってきます。相談者その人の気分も変わってきます。かかわり方によって相手は変化し、あるいは変わらなかったりもするので、そこは気をつけなくてはいけないところだなと思っています。

僧侶として社会のために何ができるか

藤木　そうして一般の方々からも相談を受け、答えていらっしゃるお立場から、何か宗門へのご提言をいただくことができますか。

前田　提言というのは、希望ということになりますか。

藤木　そうですね、こうあればとか。

前田　実は今日も午前中、宗門の会議がありました。ご存じかもしれませんが、総合研究センターの「こころの問題研究プロジェクト」といって、月に一回会議を重ねて、もう丸七年になりますか。テーマには自死問題などで、「人びとのこころに向き合うために」というような冊子を刊行しています。

藤木　参加者は何人ぐらいですか。

前田　座長を中心に委託研究員、総研の研究員が計十人です。そのプロジェクトの目的は、僧侶として社会のためにできることは何なのか、社会の中の一員として、われわれはどんな役割を担っていくべきなのか、それをずっと継続して研究し訴えております。雰囲気はとてもいいプロジェクトだと思います。毎回毎回学びがあります。

　宗門寺院に、もし申し上げることがあるとしたら、私たちは仏教という大きな、とても大切な財産を持っている。われわれにはその財産を人に伝える義務があります。またチャンスもあるわけですから、われわれが担っていくべきことをより意識し、忙しい檀務の中でも、人に寄り添うとは一体どういうことなのだろうかとか、そういうところを考えて、ぜひ実践をしていただきたいなと思っています。僧侶は生き方を説きます、説くべきだと思いますので、それはどんな場面でもニーズはあるはずなので、そういうところを意識してくださるといいなと思いますね。必ずしも私がやっているように相談を受けましょうということではなく、こういう話をみんなで共有して形にしていく。あるいは、いったん立ち止まって、果たしてそれはどういうことなのかと、自己への問いに移行していく、そうしながら一歩一歩進んでいく事が大事かなと思います。

藤木　お集りになるのは東京の方が中心ですか。

前田　いいえ。私以外はみんな地方の僧侶方です。

藤木　そうすると、そこで学んだ方が地方に戻って、地方の若手の方々にそういうお話が広がっていくとすると、それはなかなか大事な活動になりますね。

前田　それは研修会とか、あと単発で人権学習とかありますから、そこでお話させていただいておりますけれども、残念なことに、なぜかそこに必要性を感じてくださらない方も少なからずいらっしゃる。要するに、法事で忙しくてそれどころではないとか、なんでそんなことをしなくてはいけないのかと、そういう意見も残念ながら少なからずあります。正直申し上げれば、なかなか形にならずに、全国的にそういう動きが現れないのは、実は否定的あるいは積極的ではない方のほうが多いためと感じております。

カウンセラーでなく宗教者が求められている

前田　私が関係しているもので、「自死・自殺に向き合う僧侶の会」があります。自死・自殺の問題を何とかしたいという思いをもつ僧侶の集まりですが、浄土真宗、日蓮宗、浄土宗、臨済宗、真言宗、天台宗そして曹洞宗の有志が参加して、われわれだからこそできる役割を考え、その研鑽と遺族の方々の会、追悼法要や手紙相談などの活動を続けている。実際の行動では、僧侶以外の人たちとも連携してすすめています。

　毎月第四木曜日に、築地の本願寺さんの一室をお借りして定例会と、自死遺族の分かち合い「いのちの集い」を開催していますが、これは全国で行われている「自死遺族の分かち合い」のどこよりも出席者が多いと言われています。ほかのところでは集まって十数人、われわれが行っている分かち合いには、大体二五人から三〇人ぐらいいらっしゃる。なぜかというと、ほかの団体の場合は多くが土日であるのに対し、われわれは平日の午前中と、そういうことも影響しているかもしれません。一概にはいえませんが、ご遺族が参加しやすい曜日というのは、必ずしも土日などの休日ではないのです。

　ですから、ほかの方々ができないところ、穴の開いてしまったところに私たちは入り込むことができるし、逆に言えば、私たちができないところを周りの方がちゃんとカバーしてくださっているというような形で、うまく社会の中でシステム化されて、お互いに支え合いながらやっている。どこもできないところをわれわれが担っていく、これはすごく手応えのある活動です、

　築地本願寺をベースとして活動している関係から、実は中央区の保健所が中心になっている、自殺対策協議会というのがありますが、私はその委員をさせていただいています。また港区でも去年から自殺対策関係機関連絡会が立ち上がりました。私は港区在住ということで、その活動をしている区役所の方から声を掛けていただいて、ここの委員も務めています。そういうようなことを考えても、やっぱり求められているんです、宗教者や僧侶が。私たちが話を聞くことと、カウンセラーが話を聞くことは全然違う。その辺の違いというものがあるというところまで、皆さんに気づいていただいているわけです。

　例えば引きこもりというような問題に対して、今の社会だったら引きこもるという生き方もいいじゃないかと、無責任な答え方があります。でも、その引きこもる人というのは非常な生きにくさを感じているわけですよね。非常に苦しい状況にある引きこもりに対して、そういう生き方だってあるというのは、当事者にとって、実はすごく無責任な言葉だと思います。

　もし、そこにかかわるとしたら、その言い方がいいかどうかというのは別として、例えば「引きこもりという生き方だっていいと思う、だけれども、その中でも自分で責任を持っていこうよ」と、この一言を添えることができ、その責任を持つということはどういうことかを問い、ともに考えていくことができる。勿論、伝え方やタイミングな、当事者の状況などによってよく考えるべきですが、私は結局、その人の人生を代わりに生きていくことはできない、誰も引きこもりの人の身代りにはなれません。ですから、宗教者のそういうかかわり方こそが無責任ではない、本来かかわるべきかかわり方だと思うんですね。

自分に責任の持てる生き方を見つける

藤木　家庭でも、学校でも、社会でも学ぶ場がないとなると、ないない尽くしの中で、そこで育つ子どもたちには何も指針が生まれませんね。

前田　当然ですね。だって、自分の生き方の指針を持っていない大人が子どもを教育しているわけです。そこから子どもが自分の生き方を学べるはずがない。教師が子どもを教育していくために何が一番大切かというと、私が思うには、子どもを大人にちゃんと育てていくという意識だと思う。もちろん勉強も、計算ができるということも大切かもしれませんけれども、いかに無常な世の中を強く生きていくか、どうやって生きていくのか、それを教えるのが大人だと思います。

　ちょっと批判めいてしまいますが、今のいろいろな諸問題を見ていると、それができない大人があまりにも多いと思います。退学に値するようなケースでも、問題を起こした人間を社会に放り投げることなく、この学校で責任を持って育てるという意識を強くもって頂きたいと思うのです。

藤木　これは親に対しても、同じようなことが言えますね。一番大事なのは家庭からということですね。

前田　その視点がちゃんと持てれば、いい学校に行かなくてはいけないとか、年収はど

れぐらいでなければいけないなど、さほど気にすることではないことだと思えてきます。ここに相談に来た子もそうですし、近所の親御さんとも何となく話をしていると、結局頼りになるのは経済力だと思われているようです。もちろん経済力は大切ですが、幼いうちからそんな偏った考えを持つ人が増えています。本当にそれが大切なのかということに疑問をもつとか、自己への問いかけがなされているかというとそうではないようです。この無常の世の中では得がたいことを価値観として、子どもを教育しようなんてあり得ない話になってきます。

　私はいろいろな生き方、最終的に自分に責任を持てる生き方を見いだしていくという、教育・養育の仕方が大切だと思うきっかけになったのは、自死遺族の方々の声なんです。大切なお子さんを亡くされて、本当に内臓をえぐり出されるような思いで毎日を送っている、そういう方が、亡くなった子に対して、成績は悪かったけれども、ばかな子だったけれども、生きていてくれさえすればよかったと、皆さんおっしゃる。

　私は必ずしも全てを理解できるわけではありませんが、そういう声がいつまでも頭に残り、耳に残っています。それを基準に命というものと、社会的な地位だとか、経済的なものだとか、そういうものを引っくるめて考えたときに、子供が生きていてくれさえいればいいと思う気持ちはよく分かります。そこから初めて、今申し上げたような価値観が生まれてきたというか、本来どうなのかという自己の中での問いが生まれてきたような気がします。

臨床宗教師について

藤木　他宗の方々とも協力し合って、自殺に向き合う活動をなさっておられるとのお話ですが、この間、臨床宗教師の設立記念シンポジウムがありました。臨床宗教師とはご承知のように、三・一一東日本大震災後の宗教者の活動として発生してきたものですが、あの大震災は東北地方という仏教の根付いた所だったから、お寺が集会場になったり、避難所になったりしながら被災者を支えてきたわけです。もし仮に関東で起きていたらどうだったか、全く違った動きになったんじゃないかというようなことも言われていて、これからは宗教者同士、協力し合ってやっていかなければいけないと、そういう趣旨ですね。宗教者が分裂したり、批判し合ったりしている時代ではない。

前田　私の理解が足りないのかもしれませんが、その臨床宗教師というものに疑問がありまして、ちょっと方法が違うのではないかなと思っています。臨床ということだけで、宗教師とか仏教者というような言葉を使わなければいいと思うんですけれども、宗教者や仏教者というものが前面に出てくると、檀信徒の立場からしてみると、じゃあうちの菩提寺の住職は何なのかという見方が必ず出てきます。現代のように宗教への拒絶や関心が低く様々な形で情報が行き交う社会では、宗教師と「私の菩提寺の住職」を違う宗教者として見られることもあり、益々一般衆生と宗教者が離れてしまう、そういう弊害があると感じています。

　もちろん、入りにくい未開拓の現場に入りやすくするための一つの方法だと思い、ニーズを考えれば素晴らしいことだと思いますけれども、それでも、今まで活動をしたくてもできなかった僧侶にとって、こういう資格ができることで、より資格を持たないことで置いてきぼり感に苛まれてしまう僧侶もいるのではないか、その一つの原因になりはしないかと思うのです。私は、「僧侶は僧侶でいい」と思う。臨床宗教師という特別な資格や、あるいは特別にカテゴライズするのではなくて、寺院・僧侶という財産を現代社会において一律に活かしていける方法を考えるべきだと思います。

藤木　それは仏教者でしたら、各宗派で僧侶の資格というものはきちんと持った上でという前提はありますね。臨床宗教師の動きを少し弁護しますと、三・一一が起きてあれだけうろたえたにもかかわらず、宗教者が社会に向き合うということが、なかなかできないのが現状です。それは仏教各宗派だけでなく、キリスト教ほか他宗教も含めて同じで、それぞれの独自の勉強方式、あるいは実践方式の取り組みだけでは社会に対応できなくなっている。

前田　宗教者が社会と向き合うということが、なかなかできないのは何故でしょうか。

　社会に向き合うことが困難なのは、資格の問題ではなく、宗教者の覚悟の問題のような気がします。先にも話題になった子弟教育が大きく関わっているのではないでしょうか。

僧侶という肩書だけで何ができるか

前田　被災者や遺族の人たちに二次的な被害を与えるということ、私の体験から具体的にお話しますと、平成十四、五年のころです。長崎県では自殺対策が結構盛んに行われていて、医療従事者も積極的にかかわっています。そのときに、大村市で二泊三日の研修会があったんですね。自死遺族の方が最後におっしゃったのは「この自殺問題によってあなた方が輝くようなことがあってはなりません」と。これは私には衝撃的でした。要するに、自分のアイデンティティ確立のために自死遺族の方々を利用するなということです。

「あなたはなぜこの問題にかかわっているのか、またこの問題にかかわって、あなたは何をしたいのか、それを明確にしてください」ということであり、「興味があるからというだけで、また、そのような自分の気持ちに気づかずに活動するのはやめてくださいね」ということでした。これは核心を突いていまして、人間の行動原理を考えれば、みんなやりたいからやっているだけ。私がやりたいと思うからやっているに過ぎない。それを基準に考えておかないと、被災地でもいろいろな二次被害がありましたように、結局自分たちの居場所を求め来るがために良からぬ方向に行ってしまうことになる。

　これは被災地ばかりではなくて、どんな悲嘆の現場でも同じことが言えると思います。そういう意味で、宗教者が現場に入りやすくするために資格をつくればいいかというとそうではないはずです。安易にそういうような方向に走らずに、僧侶という肩書だけで何ができるのか、何をしようとしているのかということを突き詰めないと、そういう二次的な被害はもちろんのこと、結局、自己を確立することができないで終わってしまう、そういう懸念があるものですから。

藤木　それは重要なご指摘と思います。何かそういう組織なり機構なりを立ち上げることによって、それで事足りると思ってはいけない。本来、自分はどこにいるか、何をするべきか、そのための勉強だとは思いますね。

前田　いろいろな、例えばシンポジウムだったらシンポジウム、一日の研修の場であれば一日の研修の場、一時間の研修の場であれば一時間の研修の場、そのときそのときに、自分に対しての視点をちゃんと見失わずに、現場を見据えて、具体性を見失わずに、その時間を過ごすことができればいいなと思いますね。

藤木　そうです、そう思いますね。

前田　そうでないと、その辺がおろそかになると、まさにどこかの福祉士がおっしゃったように、癒したい人の卑しさ、要するに自己肯定感を高めるために、その活動をしているというようなことになりかねません。宗教者である以上は、そこが一番肝心なところでしょう。人知れず黙々と人の話を聞き続けている人もいます、そういう人はすごいなと思いますね。

社会苦に対して、僧侶が特別に行わなくてはいけないこともありますが、檀信徒への徹底した布教強化の重要性を感じています。その地道で当たり前のことを全ての寺院や僧侶が行えば、弊害の少ない形で社会の中での役割を得ることが出来ると思います。

東日本大震災 慰霊と復興祈願の行脚「祈りの道」

「祈りの道」

曹洞宗東北管区教化センターは、本年一二月一日に設立四〇年を迎えます。この記念事業として、五月、〝慰霊と復興の祈りを胸に、心を一つに〟を掲げ、東日本大震災の慰霊と復興祈願の行脚「祈りの道」を実施しました。今から四年前、設立四〇周年へ向けた準備をはじめることとなり、東北管区の僧侶として何をすべきなのか、ふさわしいかと考えた時、東日本大震災と東京電力福島第一原発事故で被害を受けた方に寄り添いたいとの思いからです。

　被害の大きかった岩手・宮城・福島の沿岸部を六日間かけての行脚。最終地点を宮城県石巻市洞源院とし、岩手県宮古市の常安寺から出発する北ルート、福島県南相馬市の同慶寺から出発する南ルートを設け、東北六県の各宗務所が担当してのリレー形式です。過去にも岩手、宮城、福島、それぞれの地域で、祈りの行脚は行われました。また曹洞宗として折々に復興祈願と慰霊の法要を執り行いましたが、東北六県の僧侶が参加する行脚は今回がはじめてです。大本山永平寺、大本山總持寺の両禅師様がご供養と震災復興の祈願を揮毫されたお札と青森県の恐山の灯火、山形県善寶寺の浄水を奉持しました。

行脚の道のり

初日は五月六日。日々の行脚は、長い日で約二〇キロメートル。「祈りの道」と印字された幟を掲げ、般若心経を唱えながら歩きます。

　海岸からすぐの場所にある浄土宗の浄土寺でも慰霊法要を行いました。宗派の枠を超え被災地全体を巡る行脚にしたいという意図がありました。浄土寺は震災前には八百坪の敷地に本堂や庫裏、客殿などの建物がありましたが、過去帳も含めて津波ですべて流されました。千戸以上あった墓石もやはりすべてなぎ倒され、現在は簡易な建物と慰霊碑あるのみです。そこからすぐの海沿いには完成したばかりの観音像があり、こちらでも法要を行いました。近くにお住いの檀家さんもはじめてこられたとおっしゃるくらいで、普段ここを訪れる人はほとんどいないようです。周囲を見渡しても復興にはまだまだ遠く、更地に家の基礎だけが残り、草だけがぼうぼうと生えている風景が広がっていました。

「祈りの道」六日目の最終日。空は白く小雨模様でしたが、塩釜の福定寺を出発し行脚を続けます。海上の慰霊法要の前に、マリンゲート塩釜にて慰霊法要を行いました。テントを張り祭壇を作り、お札やお水などもお供えし、檀信徒も大勢やってきました。檀信徒が見送る中、海上での慰霊法要へと出港しました。当初の予定では北ルートと南ルートがそれぞれ一〇箇所で法要をする予定でしたが、悪天候のため北ルートは残念ながら断念。南ルートのみ、一〇箇所から六箇所と数を減らしての法要となりました。

　船はなんとか出ましたが雨と風は強くなってきました。海上に他の船は見当たりませんが、津波ですべて流されてしまった牡蠣の養殖場が新しく設置されており、復興を感じることが出来ました。

　内海はまだ穏やかでしたが、外海に出るとかなり波が高くなりました。それでも海上で船を止め、前後に大きく揺れる中で慰霊法要を行いました。海上では特別に、お経の後、善寶寺の浄水とお地蔵様のお札を撒きました。どんよりした風景の中で朱塗りの大きな桶は鮮やかに映え、水面に広がったお地蔵様のお札は雪のようでした。「流し地蔵」というお札で、宮城県内の巡礼浜供養で用いられているものです。

　最終目的地である宮城県石巻市の洞源院にたどり着きました。慰霊・復興祈願法要を行います。洞源院梅花講の皆様による梅花流詠讃歌のあと、管区統監高橋哲秋老師より挨拶があり、法要が静かに始まりました。復興祈願は、東北管区長佐藤良裕老師山形県第三宗務所長、次に、管区長代行海野義清老師岩手県宗務所長がなされ、最後に宮城県宗務所長の洞源院住職小野崎秀通老師から、「東北の総意としての法要ができた」との言葉がありました。

　洞源院は海辺の近くにある寺院ですが、高台にあることから津波の被害を免れました。震災直後から避難所として開放し、多い時は四〇〇人を越える地域の方々が暮らしました。本堂にはその当時住職によって書かれた「共同生活の約束」がいまも貼ってあり、挨拶をすることや整理整頓を心がけること、譲り合うこと、日光浴や散歩をすることなどが明記されています。

　石巻では公共の保育所を9か所も失い、たくさんの家族が引っ越していきました。子供たちがいないと町に未来がなくなってしまうと住職は考え、募金を集めて、現在、石巻市内に保育所を2つ立ち上げています。小野崎住職の妻美紀さんは、避難生活の中でだんだんと発せられるようになった言葉を書き留め、それらの言葉を「あったかい手」という詩集として二〇一一年九月に発売しました。保育園の支援金となるこの詩集は、本とCDのセットで制作され、現在も販売を続けています。

（本・CDの購入と募金方法については「社会福祉法人　輝宝福祉会」のホームページをご覧ください。）

寺院が地域のためにできること

　山形県第二宗務所有志による「震災復興ボランティア会チームおきたま」の鈴木良典さんは自身の被害は少なく、震災一週間後には被災地へガソリンを運んでいます。山形の地元では停電がなく、被災地とは別ルートでガソリンが入るので何度も運べたとのこと。チームおきたまは現在も米沢の「避難者支援センターおいで」へ週一回訪れています。熊本の地震でもすぐに熊本の宗務所と連絡を取り合い、水などの物資を送りました。ある慰霊行脚では神職の団体と一緒に行動する機会があり、独自の情報網を持っていることや活発な行動力を感じたそうです。行政ではない全国的なネットワークがあるのは強みですと語り、会の名前にある「震災復興」を取ろうという話が出ているとも教えてくれました。

　震災後、地域に開かれた避難所として活用してもらおうと動き始めた寺院は多くあります。自前で自家発電機を購入したり、AED（自動体外式除細動器）を置いたり、食料を備蓄したり。東日本大震災でお寺に避難してきた人はお米を食べられました。仏様にお供えする「仏供米」のストックがあったからです。仙台市にある昌林寺の松山宏佑住職も「寺が地域の皆さんに役立っていくような場になってほしい」と話していました。

被災地の明るい未来に向けて

「祈りの道」とはどういう意味なのでしょうか。このネーミングを決定するのに時間がかかったと東北管区教化センター主監の東海泰典さんは語ります。「祈りとは、福島第一原発事故の早期収束であり、被災者が自宅に帰れるように、また亡くなった方のご冥福です。事故前は原子力発電について知識がなかった。反対の声はあったかもしれないが一部でしたよね。震災前は地域住民には原発の恩恵があったかもしれませんが、この先何十年と故郷に戻れないという被害は大きすぎます。

　今回、多くの方のお世話になりました。宮城県相馬市、慶徳寺の出発ではたまたま法螺貝がありました。相馬野馬追で法螺貝を使いますし葬儀の時に供養で法螺貝を吹くこともあるそうで、法螺貝を吹いての出発となりました。地元の青年会が来てくれて、鼓鈸をやってもらったりしたこともあります。それぞれの供養の思いを感じましたし、ありがたかったです。

　東北六県の僧侶が慰霊と復興の祈りを持って心を一つにする。無事に終了することができましたが、この祈りと行脚の経験が、これからの東北の未来を照らすことを期待します」。（取材・ほったさとこ）

仏教企画通信

ご支援寺院名
H28.5.2～7.31

所在地	寺院名（個人名）	金額
静岡県	可睡斎	20,000
合　計		20,000

手まり学園

寄附者御芳名
H28.5.2～7.31

所在地	寺院名（個人名）	金額
神奈川県	青木義次	5,000
北海道	浅田富美枝	10,000
神奈川県	青木義次	5,000
合　計		20,000

仏教企画発行の刊行物

（★部数により割引があります）　すべて税別価格です

『修証義』解説	丸山劫外著	1,400円★
『うたい継ごうよ、子守唄』	長田暁二・西舘好子共著	1,200円★
『まんが問答一期一話』	文 平和宏昭 まんが 垣内敬遠	1,200円★
『道元禅より見たる般若心経解説』	長井龍遺著	2,200円
『葬送のしおり』	長井龍遺著	30円
『わが心の釈尊伝』	須田道輝著	1,800円
修証義読本『生老病死』	須田道輝著	500円★
『曹洞宗檀信徒経典』	須田道輝解説	300円★
曹洞宗檀信徒必読『供養のすべて』	霊元丈法著	140円★
曹洞宗檀信徒必読『葬儀のすべて』	霊元丈法著	150円★

曹洞禅グラフ

発行日	
春 彼岸号	2月20日
夏 お盆号	5月30日
秋 彼岸号	8月30日
冬 正月号	10月30日

1部 200円

9部以下	200円
10部以上	150円に割引
20部以上	135円に割引
50部以上	130円に割引
100部以上	120円に割引
200部以上	110円に割引
300部以上	100円に割引
500部以上	90円に割引

＊『仏教企画通信』を10部以上購読希望の方は一部100円で頒布致します。
同封はがきの空欄にその旨をお書きください。（消費税、送料別）

お申込み

仏教企画
〒252-0113　神奈川県相模原市緑区谷ケ原2-9-5-5
TEL: 042-703-8641　FAX: 042-783-0989　Email: fujiki@water.ocn.ne.jp
※ご寺院名後の番号（3桁もしくは4桁）がお客様番号（コード）になります。
お申込みは　①ご寺院名　②お客様番号　③電話番号でも可能です。

編集後記

『曹洞禅グラフ』を発刊して35年、『仏教企画通信』は15年になりました。

この間、途切れることなく発行出来ましたのは定期不定期を問わずご購読いただきましたご寺院方のおかげであります。心から感謝申し上げます。

創刊から第35号｛平成3年（冬・お正月号）｝までは『永平寺グラフ』（題字は秦慧玉禅師）として発行していましたが、36号から『曹洞禅グラフ』になりました。

久しぶりに創刊号を手にしました。発刊当時どう動きどのような内容だったかが思い出され、暫し過去の時間に自分を置くことができ、いい時間が過ごせました。

さて、創刊号の内容ですが、表紙は大本山永平寺の勅使門、2ページに当時の貫首秦慧玉禅師から「夏雲多奇峰」のご揮毫をいただきました。特集は当時の副監院峰岸応哉老師に『あなたは生きているか』というテーマでインタビューし、評論家扇谷正造氏から「永平寺と私」、滋賀県正伝寺住職、北野良道師から「お盆に思う」と題してご寄稿いただきました。

また若き日の瀬戸内寂聴さんにもインタビューしました。当時の監院宮崎奕保老師には『典座教訓』の教えをいただき、典座・赤崎玄輝老師から夏の酢の物料理をご紹介いただいています。

創刊号の内容はそれなりだったのではないかと一人悦に入っております。故人になられた方も多く懐かしい思い出とお世話になった感謝がこみ上げてまいります。

あれから35年間、健康にも恵まれスタッフにも助けられ、細々ですが何とかここまで参りました。

これからも檀信徒や禅仏教に関心のある読者に役立つ誌面作りを心掛けたいと思います。

ご寺院方のご支援を今後もよろしくお願い申し上げます。

宗議会では旧多々良学園の後処理を巡って大きな問題になっているようです。

現内局はたぶん責任の一端は宗議会にもあったのだから、それぞれ応分に負担して多々良問題に終止符を打ちたかったのではなかったかと推測します。しかしながらその手続きに問題があったようです。現内局が関係者に「催促書」を送り、その結果現在3000万円弱が納められたようです。

問題になっているのは「催告書」が一方的に送られて来た事とその金額が何を根拠として出されたかなどのようです。その手続きについては、先の宗議会でも問題になり採決した結果4分の3が問題ないとの事で催告書問題は解決されたかのように見えたが、7月11日付で宗務総長経験者の渕英徳師と佐々木孝一師が連名で「催告書」に異議を申し立てる文書を送りつけたようです。

さて、今までの内局は多々良問題をどう処理しようと動いたのでしょうか。いつも問題を先送りしてきたようにしか思えないのですが、ご寺院方にはどのように写っていますか。手続論が問題として浮上していますが、長年の先送りの付けが回って来たのではないでしょうか。

ここまで問題がややこしくなったならば、宗議会は臨時宗議会を開き、自分たちの責任の所在をはっきりさせるべきではないかと思います。

ご承知のように多々良学園は人手に渡りました。銀行からの借り入れはたしか10億円で示談したようですがこの金額も宗門持ちです。被害総額は100億円とも試算されています。我が宗門は踏んだり蹴ったりです。

当時宗議会の機能がよく働いていればこのようなことにはならなかったと思うと残念でなりません。いかに当時の宗議会が機能不全に陥っていたかです。

多々良事件は有道会、総和会同数という一見、民主主義と思われるシステムがこうした状況を生み出したともいえます。目の前のことについては議論が伯仲するようですが、本来問題にすべきことに声を出すべきです。

光の見えない宗議会の世界を変えるには、宗務総長選出は公選制にしたらどうかと思います。代議員制では宗門を引っ張る人材が出て来ません。

多々良問題が風化しつつある中で、この問題にかかわった宗議会議員の方々が多々良問題をどのように捉えておられるかですが、少なくとも一宗門人としては責任の一端は宗議会にあったと表明していただきたいものです。

高野山真言宗では現内局が前宗務総長などに数億円の損害賠償を起こしています。我が宗門ではこのようなことにはなっていませんが、実は集団訴訟が起こっても不思議ではない大事件です。全国のご寺院方はどうお考えでしょうか。

私はせめても事件に関わった宗議会からは謝罪の一文があってしかるべきと思います。宗議会は早くこの問題に決着をつけ、前に向かってつき進んでほしいものです。

藤木隆宣